



武江年表

三





武江年表卷之三

延宝元年癸丑

九月廿一日改元

身請弘福寺宝剣

尾山後牛  
徑師也

翌年小石川法堂止道堂成○淺草正直

菩提寺始○九月十七日後法九代程繁率七十才

○十月廿二日蓮舟師里村玄祥率○十一月廿念地院立山十刹法

山慈福月命あふ○十一月廿拾上寺大澤成谷原常味  
此寺之清くも云

○十一月廿日行桐石丹彦率六十九号宗園石丹流華乃之祖  
あり宗院高林高小葉行

○幼二帝其居少く大名頼頼天正  
推立を上下市續担を具行元祖後十而  
十に方あり

初蘇志意を率り  
始て荒りともあり

同二年 甲寅

武江年表卷之三



二月廣草大田寺十五重再建○二月廿六日夜帳を計の要雲  
東より西に捲引空中掃き海に落ち

○八月久保八幡之内時の鐘其切也引引若松有也其持し  
成る○了翁坊白金瑞雲寺の経巻を速荒典に生一万余巻を  
を収む○久保坊○松尾忠茂乃今年葬祭し之凡羅坊

深川坊を括ひて經久芭蕉一掃を裁世入芭蕉 居といふ

○十月七日持神探幽法中卒七十三才二田大寺より小墓碑あり 居まの内建並一雨之といふ

○同廿四日三玉等海堂卒久正の能出あり 弟自持院小卒 四月四日

○二月六日古筆り代卒○二月廿二日合形新地船入が成る  
善天中肌體念庵を葬し之後氏を張給しあり

○二月十四日古筆り雪卒六十才又念庵と号 善のりあり

○九月本控町山村長吉其居を始て其後續其を興行は  
此坊の名譽務閑芸者哉といひ梅の小亭露妓の始小血縁二年未其室町夜の湯  
高の由り不短云々といひ燈さき一坊系屋万吉其山村又左方未形りて其雲のふり外  
男女交りて其家相を傳へけりといひ  
其の六等母故小其我れををいひるを古

同日卒 丙辰

七月十四日風の宮東流あり○九月換炮海築地中室守ち其勅を

能興行一奉小春 ともりありその乃成り雨降○八月十七日儒送形有之竹系降

柳谷小卒名小芭蕉号静軒本朝 聖業を講じの始之云○九月廿二日夜子刻増上寺又室大火

其本寺安重の所焼火盛あり一人身を潰して烟中入其像を  
持て居る後以て其を着るもの或の信と一或の信と一不見其像

あり又其足跡あり欠れ其を更帳の中を於て拾ひ張りて其を



接てりし如く上津土渡小

○十一月七日暮六時許京江戸

町二丁目より火火して新水風烈しく一廓焼亡此火廓亦焼か

て本所中のみのみりりて終る以時女十二人焼死其後始て焼る

○十二月廿六日江戸小火災あり二宮の脇に飯宅あり高きす

延宝八年 丁巳 十二月

己月八日下谷池のまへ横田七郎右衛門の事と云ひ無く難司

若鬼子母神を祈りし其男木村作左衛門小畑町三又川中

今日鬼子母神像を感得し其後七郎右衛門の妻男子を以て翌年

此像を本所本佛より安んずる○七月中旬より江戸中町へ踊

りしはり災難を以て由り御祈禱あり此の一本小延宝己の年の冬

○八月六日大風雨本橋町甚きを以て溺上る溺りあり老か溺るなり

○江戸省板紙七巻 ○奉朝改元考二冊刊行重加編

同六年 戊午

河原上人真澤村澤真与九品佛冥基○東海道釋法録五冊梓行

○舟舞妓甚く所存元江代月市村行々遊伎藝の芸云々俗者

貌も災難ありしありて無常を悟り菩提の門に入り今年

廿五日依後を勘定清浄心して修行法師とあり想をさる

少く舞納の目刺髪して舞臺より後を脊おひ流し流りし

ある後小本所立つ目自性院を再興し常行念佛を修め世に

作の恩を承りし享保三年 ○十月六日羽根右系時行率千七

○同月八日古筆二代り榮率七十二

同七年 己未



夏大為大川筋まがに生糸あり

○十一月二日浪人平井権八浪人西川五郎浪人に刑せしむ浪人の初め西川五郎  
の初め西川五郎の長き糸を九組で織りしりて同一時分と  
る人あり糸を織りしりて織りしりてありしり

○十二月十二日連舟所里村思通率六十五方

延宝八年 庚申 八月廿

正月八日落木春朝率北黄坊持次と号し大河の事をあつて海賊を信し

○二月十日朝五半時に半時に近園夜のわし（宗内情書  
并海考江下多宗  
因今并り要し

○二月十日朝五半時に半時に近園夜のわし（宗内情書  
て二月十日朝五半時ありしりて或は六月元より為奉教し六月唐定後築地入り川りて  
南向小舟中継りしりて一貫文二年の江戸々記小元より六月時始て建立しありしり  
周あり今朝大坂町を元町と唱ふしりて昔為奉教し築地入り川りて同日の本例ありしり  
ありしり橋の氣を高くしりて家多しありしりて西より唱へしりてありしり

○二月十日朝五半時に半時に近園夜のわし（宗内情書  
○五月林甚秋春務率 六十五方

○六月廿九日能人松江権舟率七十回也 冬重教

五智如来の大佛入仏信あり再建  
信林大寺重教 ○八月廿八日甚如来あり

原町靈巖信後池八丁信海と信上りて信あり信

権損信しり信止る信谷中信法信あり信本信里信深信あり信半信傾信く信

在信海信に信筋信あり信浩信波信あり信て信氏信家信を信觸信し信

○十月晦日酉の刻信より信坤信の方信へ信度信廿信二信尺信長信あり信あり信

自信守信あり信し信根信の信里信を信長信空信あり信し信る信三月信まで信

○技藝拾葉全集信 三十三巻

此年間記事

永代信八幡宮信の信信信を信離信ま信て信糸信の信事信も信稀信あり信し信る信一信六信延信室信  
の信こ信ろ信に信と信り信る信前信二信三信町信の信う信ち信酒信持信茶信亭信を信信信る信女信を信











天和元年 辛酉 九月廿五日改元

二月五日田中後守宗刻

上野田八幡別当後守宗刻  
亮賢宗墓 五月院敷と改る

○浅草川廣ぐる ○諸公肌腫 ○山王神田の事終隔年あり事

是より五多礼  
年毎小節あり

○日蓮上人に百年忌

法苑宗子  
院法命

○十一月廿八日九山が妙子

とりの火事いり焼亡 ○十二月廿八日川田の産より火事して川田  
赤坂麻布三田芝生町あり ○今年支國橋法掛あり矢の  
念南服より奉新二目的橋障へ渡る後橋を設く今を元改出  
とりの十五年の後元禄九年より今の所へ経営あり

同二年 壬戌

二月六日市谷小あり一後本山天龍寺新火事遂翌年巳首

後守る ○二月廿八日俳人為山宗周江戸に平氏 七十八才

○三月俳人名田末孫年 未將の男あり ○四月琉球人素禰 正役の權子

○四月十七日明の系舞あり生約込中平 年八十二 常初久茲那瑞毫中

并葬以 ○四月廿九日將時雪彦年 に十才 撰出女

○七月儒師本下順庵 信務 年三九

○七月二日大雷に十降雨墮 ○同日落合茶屋より常山白翁が茶

禪師寂以 ○七月法藏人海瑞瑞信の於天下一の号を信 とく

○同月在形船の寸法法定あり ○八月朝鮮人林禱 正使尹祖賢副使李  
彦綱使事朴夢の後

奉持ててを  
旅版とい ○九月安宅丸舟船を解ひしうせあり

○九月より幕府船本敷山内小地をのりり ざりやう 学寮を建不忠中

清より幕府船を救一經堂を建る ○青山橋を系長孫より古調

佛河津陸像を安置以 高平に年  
一勝より 昔本本が寺の月あり一と大坂



城下移さきしう高城の後江戸持来り今村来り八丁堀の在  
るありしと堂守伝念和向小約し今年九月送る所とそ

○十一月晦日戸田茂勝ら男侍等率て墓新浅草合宿より在  
る追悼の奇人の智恵あるのせり

○十二月廿八日赤下刻為込大田寺にお火  
事江上野下谷池のそへ船遠点門神田の是日木橋まで浅草法務  
園法門る喰町辺矢の法念を因國橋焼落本新深川よりある

入る法火也 此火より不遇して法室を多るりの或は焼死怪入未幾一々天神の姿を  
人あつて法火悲泣のさぬを哀憫して字寮のり箱橋に今年末遊く  
並そ一書籍の科一子二百支の法を分員人小施せりこの法池のそへ付丁勸学堂の市店土産  
小人入てぬ年求並け内介の虫籍一万にふ版巻戻焼とありしより深川の世甚  
痛急火よりこまれ箱も湖もひひり

此火の後本新士民の家を拂せし  
元ノ田圃と減る ○湯沼小町屋をねせしれ橋の場とある  
天和三年 癸亥 五月望

正月元日大馬波あり ○正月車長持を掃せしる 火災の時乃路の  
跡とあるあり

○二月六日市谷お火 ○二月十六日牛込お火

○浅若小路実隆公下向 浅若小路  
を立ぬあり

あるりしと其のの素いあるしれも亦も始りしをいふあり

○本年筋廣小橋より減る ○二月廿九日約込所八百屋久き橋の娘

お七火刑小橋より 今年士の女とりしを類素世人の知る所あり十二支の春松竹梅の  
二字を去る核家をのいまの流殿小橋より今小ありこの  
お七の官中七面文のまうし子ある也うくえつけしとて之橋裏ハ約込所を寺并  
ありを世身探枝の家再建する所あり 郊外雲霧湯沼江戸官中蔵蔵もの廻所を小  
うけしるを靈燈山法華宗よりて云部八百屋娘お七支の年晦之遊堂に年  
辰ま三月と虫宿又回虫并お七火刑天和二年とあるせり此橋あり

○夏江戸大昇久 ○六月六日辰辰年内率 此堂一素居士との小橋より  
條の年内あり約込海彦と小

○雲光院本寺も法務より勸学堂とあり

墓あり耳底記小ま山を掃り  
人の死より法勇の人ありとあり  
の災後本神田の辺より深川へ移る喰町の如小ありし於行と約込











○知良院を湯島へ移す舊地へ林田の森あり

○弘法大師八百五十年忌 ○二月廿日古寺二代了社率四十才

○東福寺七仏茶席下谷より麻布其茶室へ移す

○九月廿二日官医速見本玄琳率麻布祥雲寺 ○九月大風家屋を吹倒す

○十二月圍基作保井算哲天文儀小正良 良良義抄そそ天宗妻へ改磨の

○甲子江戸鑑刊行松令家板或器板行の始といふ

○東世改磨領行但宣成磨を改め小正あり

貞享二年乙丑

二月廿二日流星東南より西北へ光程百里を照り暫く

有く空に雷ありひびき ○其二田魚屋親吉閑帳後井よりこの帳なる

○五月梓四子福昌と其作如來冥帳このとき三田の山塚より又もきより下りてせど

○日暮里院傍に神社造営 ○六月廣業寺智良院別當

を百敷とて東叡山浄業寺と成す ○九月廿日將時水真安伝率

十一月靈山寺再檀林と成す以時清平小あり之縁之年小正ありといふ

○同三年 丙寅 二月甲

正月一日古寺に世り周年 ○國之月利根川を武蔵と

と名を中絶し定ぬひ葛飾郡二ヶ谷小正本寺橋より東海川本西の地ハ葛飾郡葛飾郡中ヶ谷

○二月腹忌令出改元禄三年又月尚道加又同三年九月道加

○九月品川所敷改 ○九月小石川白山持現宗礼始

○九月大石川大石川の源なり 大石川大石川の源なり

○九月大石川大石川の源なり 大石川大石川の源なり

同七年 丁卯

武江年表卷之三



二月十八日より清系寺親世音宗帳 ○同寺二五門布令調親世音  
勢至像建立 頼王と親世音宗帳破林より清系寺清  
重房住持丁波井三高僧のこゝろ建立

○江戸惣麻子七冊棒行 他者友田氏

○七月廿二日より廿六日と奉前小籠て宝生寺交勧進徳興行

○女岡別家図彙板 江戸時代の風俗  
江戸小籠 ○二田実相と貞女坂念卷公愛

○正伝女貞享に奉丁卯十二月十二日あり

是書は其漢町不存の存続を考へて  
と書かざるに父母小籠あり後書稿  
ある村田傳を考へて貞享あり正傳ありと云ふ小籠あり父母再婚の事  
と近る事類あり小籠を減一日とて之を正傳を考へて貞女坂念卷を考へて  
その貞操を考へての事の後まて其の操の五六七せし 風調雨順を祈りて  
之田実相寺二ヶ寺ありと云ふ其書町御照山実相寺  
あり

此年間記事

貞享元福の頃より江谷村を去りて寺を建てて下りたる

○貞享中波あり六ヶ橋流るまより掛る事ありとあり

○貞享中波あり六ヶ橋流るまより掛る事ありとあり

因由は中波右江谷の之大橋と云ふ由は其の橋を  
つひとて元福の頃老人のありとありとあり

○駒込光源と大親育造立江戸の町人丸屋を考へて

○千解通 江戸の町人丸屋を考へて

○江戸の町人丸屋を考へて

○江戸の町人丸屋を考へて

○江戸の町人丸屋を考へて

○江戸の町人丸屋を考へて

○貞享の頃より大森村の辺りて海苔を製し

○この時代の江戸図浅草花川戸を和川とあり



○好古日録云 婦女の普く用る并ハ貞享年より河厨子所製り扱  
後並りてありて工人小形々々も後終り十数年より河内并江  
まありてありとあり

元禄元年 戊辰 九月晦日改元

○改元其年所の地ノ元ノ如ク武士亦其町屋を以て其地ノ地ノ成  
は附りて其の西ノ地ノ如ク其年所を以て改元  
○改元其年所の地ノ元ノ如ク武士亦其町屋を以て其地ノ地ノ成  
は附りて其の西ノ地ノ如ク其年所を以て改元

○九月新田明神系神樂結成始り 河内内へ入る

○十月二日儒師西山健南卒 名光善坂中 養正院小葬

○十月十八日連舟師里村昌程卒 ○十一月新田橋河内并河内院  
を編りて河内新所となりて亥年より改元筑波山後持院元禄  
年と号し 大内侍時より新河内新所を以て改元筑波山後持院元禄  
年と号し 河内新所を以て改元筑波山後持院元禄年と号し

同二年 己巳 正月

○正月十二日儒師今井弘政卒 号魯齋卒年 再葬于小葬所

○正月十六日江日老人星現 老人星の現るるの瑞あり 福喜を以て其の年と号し

○五月十六日雨天二十三間並りて河内家の長福井淡右衛門貞員五  
子二百六女を討て河内の天下つと成る

○十月婚姻の時ありあむせ河内制林あり

○十月廿五日夜異星墜の方小あり ○十二月山村孝吟翁并男  
湖を以て 召か舟学方の始あり同七年法中不叙とて

○江戸圖澄徳目板行 画工石川流宣後之 編一板一冊 ○再訂江戸熱蔵子板七冊 松月巻 尺前編

同三年 庚午

二月虎石門外を左邊町より河内まで大工町より元材本町まで



廣瀬とある長崎町の廣瀬を築 長崎町の海邊小橋の南側長崎町 鉄炮

海濱地海邊の屋宅を焼 火災の時

○四月十五日西恩池を築 西恩池 空無上人 おんあままんさん 念佛令海教を信

群集一十念を父の善の名号を乞ふ事敷

○五月官中威徳寺 今天 丈六佛建立致す未詳

○十月法華寺の別当僧法院と改 致す山家文集 百廿巻

○十二月十七日金胎工横谷宗与終 致す山家文集 東海道分間修築梓材

○十二月廿二日昌平坂大聖殿上棟 是まで其の屋下あり 今年この西より一由

妻を乃下機 菱川所宣等 この方の故を 昌平坂と改

元禄二年 辛未 八月

正月湯島丹大聖殿清浄成 上座よりうらまは地是の八林原の坊あり

非をを修くは七十二段其先儒の像八画工將神洞雲を画く二月より遷居あり  
同十一月秋奠あり也 湯島丹大聖殿の地産かり 二日 おけ橋を 古名 一橋 昌平橋と改

頌大成殿新落

芝山

登、昌平坂我、士山東斯度斯經始、倏忽成廟宮、楹、  
依勝地、莊觀聳、清穹、畫棟麗、輪、真鱗、蕙、真、玲瓏、四配、玉床、  
下雍容、珠箔、中三才、抵、太極、六經、定折衷、禮樂、享雅飾、文、  
教、克磨、礪、山、知、仁、有、樂、川、盼、道、罔、窮、時、否、欲、浮、海、栖、歸、  
魯門、豐、祀、誠、如、在、吉、蠲、捧、芳、樽、神、明、永、降、監、國、祚、齊、乾、坤、  
春、入、舞、雩、節、化、雨、澤、黎、元、

○四月麻疹流行 ○同九月俳人一押打不卜率 本西法惠 寺子舞

○同十月俳人福田彦彦云率 六十二才 ○二月碑文谷法花寺 谷中威徳寺

布谷自院法花宗悲田派をあら ひんて 天台宗とた ひんて 七月日蓮宗







善也及後生之法然上人自他像江戸に於て冥途冥途

○二月僧源務名去福林令平願珠齋約達庵光寺小葬卒

世上小疾病行る事を告ぐるとの妖云妖云一殺の噂とありてこそ

を除く某法の高札を擧げせしめりて此妖云を言ふせし者

ともを刑せしむと云元

○五月通町を小川町小石川五ヶ陣先町を安板町と改む

○六月廿八日御作こめがら之園社を小石川の句を吟せし奇蹟考ふ

記を引て去りて天下早敷ありて田面ありて之を南の句を

○七月新大橋五ヶ渡五ヶの冬五ヶ源川大橋ありてりけるとき幼君やうけり

○八月廿九日之南之文板本東吹二ヶ率二ヶ上二ヶ行二ヶ

華送の協ありて一殺并二ヶ率二ヶ也

元禄七年 甲戌 五月

正月八日狩神洞雲益信率上股獲金 ○二月廿九日小川在河上院小葬燒失

○六月廿六日杉山檢校八十餘才信一孫勤也葬寂

○八月一説不元禄八年とも云ふ正覺山月桂寺以次大護院と改む十刹安正元年十月十六日新由定不列也

○八月七十才長正覺山源次男あり月桂寺源次男あり十刹源次男あり不列也

○源川ぎん宣雲ぐん寺寺あり卒

○高田高田穴八穴八情宮情宮社社地地不不室室明明社社

を勸請也 ○江戸江戸名所活板行七卷

○増上寺増上寺世二世貞世二世養上人養上人大傍大傍正正不不但但足足ととりり代代くく大傍大傍正正なり

○十月七日十月七日奥澤村奥澤村淨土淨土寺寺卒卒所願上人所願上人寂寂

七十七才







近化 別長法親法院所居尼多く上本寺  
とまを世に益徳奉とりの

○十二月十二日水府廣徳尼平野靈葉集 ひらのせらちん  
公年表家永とて集葉  
碑の六年山紀安子有

元禄十年 丁丑 二月至

五元集拾遺 大小の吟

大 二 四六 八九 十一 十二 庭をあらくたく 衆 師老のまゝ とる角

○正月十五日北村湖喜平集 こしん

五元集 湖喜をいひみ

ほくよむ 綴冊もありむと 爰 とる角

○正月法然上人圓光大師の遺号をのこ ○飛石村に銅鏡を湯とめ

○下谷五條天祥今の所不建 首の上破小を照磨火災存願川崎春とて  
取初不語度ありとりの今年後されも際川

冒徳の  
宅地 ○酒運と法定 ○五月八日より新大橋不於て室は新と應

勅進能具行あり 室生を吏  
助を勤む ○六月部系令通用始

○同月唐同屋十一人小定 ○七月より後必とる親を半量持院

大日堂法蓮立 ○九月飛戸天満文祥の法武白川吉田小後と

右宰府の例不准とてた旨 勅許を並ぶ

○十月十七日大坂上の町よりお火長等小日向身込田安内つ代友町  
まて焼せり

版田町世羅稻荷の地中平近須君の藩中の跡ありとて又存けを町屋と成れり  
あて明三年庭立はとりの近室の江尾屋とてんる小坂の下よりを版田町とてとあり

同十一年 戊寅

正月十三日唐人桃園柳栄集 名守光号出番赤  
池上平門とて小集

○二月川村随員 百部を多 漆祿をぬる天和二年  
新梅子あり員  
享甲子年とて

とあり大坂川に普徳を命せとて切儀江戸小塚りて年表とて改と



安治川も此時浚せり ○五月小石川河段治造営

○六月九日医所板垣宇治率廣業合務 ○七月傷所園井惣巻

率名義号と東皇 ○七月津川海軍一万坪を築海防

○七月其二田新堀自令汚殿まで堀りぬる

○八月新自永代橋今日より出来ぬ

○八月東殿山根本中堂文殊橋二五門并山王社 今の西へ

廿八日仲堂入佛あり 九月三日竹長五回より商人多指を田々する 江戸府の

町屋をひく 東廣小治とせしむるもこの地あり平水町八軒町古新町東坂町

のち兵小柳町黒門町赤井井井と西の窪代地をぬる

南郭文集 東殿山瑠璃殿 一旦経営結構新 入門何處避紅塵 玉樓金殿高多少

不庇貧民七尺身

○九月六日段橋殿の勅額刻了あり 以勅額の持院院基時書ありし所水

量りて三重の柱を竹本を以て遠く橋を正す 橋板板を打自紙を以て文書を施し

紙を以て解くとのひつりを流す 殿貫不備し佛入等ありて後彫刻し漆塗端を施

○同日己刻に新橋南堀町より火出風烈しく大名小路通町筋

神田下谷上野法華坊法華山谷千坂掃部宿不敷九三 新法法系

世二万を焼く元禄十三年より津川不達投亭を河原鎌々

河原八町の道幅十五尺とぬる ○二時津神社板本ありし東殿

山中重が味好法華系田原町へ移る ○十二月十日奉石町式丁目より

火出日本橋靈巖殿八丁落換地所細島まで焼く日本橋焼屋

人多く死す ○十二月画工の夜潮波瀾せし

○十二月廿二日佛作本下町店率 名貞幹林率







正徳末ありし今正徳元年元日玄冥何の和とも知色を女の首まき級あり人々驚く一不第首ふ人の首を得ず年武門の祥瑞ありおろそとて是をまつりせんちち聖寧地神おんあむ不崇おむ世人堪てかえ後ふゆりの遊女をおろそ鹿の社ありと云ふおろそ今も永代橋の側ふ小祠あり

○二月十九日古第五代り抵率辛七○二月天波宮八百年

清忌来年お島子付毎戸社不於て詩奇連御身あり

又元集 生南の白下 ○二月系真如おろそ泰古子おろそ松林ありむる年八百年

宗様おろそ ○三月十日後村家古良家事あり一日之世人の

知る不ぬと云ふおろそ賛せおろそ ○二月麻布浄殿初てあり

○二十三間並深川不後建立又元集 新二十三年

○深川浄海寺おろそ宗刻并才天を安直宗基知豆院 隆光悟心

○肌おろそ不と川て奉新法慈古花并非人小庭を築く

○十二月和入冬長管川安清香具在修徳の三人へ高ひ

浄免あり

元禄十五年壬午 八月

二月十一日山谷屋町よりお火青山麻布急甚浦品川下り

その時麻布浄殿品川浄殿妙玉と立守品川浄殿 浄再建二五門焼亡

おろそ ○二月十五日日本おろそ提の上并傍京おろそ杭をおろそ

○其より葛西飯塚村おろそ女おろそ親世言おろそ江戸系おろそ近おろそとおろそ系おろそ浄おろそ堂

集おろそ事おろそ疑おろそ一おろそ村長の家よりおろそ後おろそ忠おろそのおろそ某おろそとおろそかおろそ以おろそ非おろそ初おろそあり

とて法人と云ふを求む又江戸西の古流へも廿七日まで 匡修寺の地を非を村内の地

○天満宮八百年浄忌 西行上八五百年忌宮後法作二百年忌







越前と号三著  
史のころとを

○十一月十日備前坂井仙元卒

号御軒泊止  
鹿光寺小堂葬

○十一月廿二日雷より電光く夜八時地鳴る半雷の如く大地震  
戸隙子らあきあき小船の大浪ふ動く如く地二三寸よりあふたり  
て五六尺程刻まゆをのこるとあひひるを吹かすも亦もあひ  
る垣壁もあき潰れ宅瓦揺あけ死人夥しく泣きけが声樹小  
買田一又雨く毀らるあきより失火あり八時迄津浪ありて房総人  
る多く死に内川一士の身引に成ありけし時より救急地震あり  
あき小田東の多く夥しく死亡の者九二子二百人小田東より品川迄  
を一万八千人房州十万人江戸二万七千餘人  
あり一由りの小傷り世時深川世之間半覆る廿二日救より  
あり津方ふ及びあり止むを後十二月まで震ふる志をくあり

内廿九日火災の附あま橋あり  
死のりのみ七十九人あり

武川神代の志をもゆりも多うとうぬ津代のみあり中陸通る

○十一月廿九日救大風幸に退きよりあきくさあきまき焼又小高より  
あきく水風ふ隊上野湯も多天神聖堂前遠橋向柳系隊系町  
南六神田より傳了町小舟町堀田小細町幸所へ丸回向院の辺津川  
水代橋まであま橋あき焼屋敷の五所鎮の志を世小地震火事  
といふ○回向院一云親善像山門小女並一りり十一月靈友の  
告ありて橋上よりあきを廿二日夜地震の附山門也倒るつひに  
廿九日の大火小徳聖焼より世時本を指退てつらあきまきり  
諸人候心のあきまきりて多預群集せしとて  
一云親善と云一云初聖一  
てと合群叶くといふことあり

世年間記事

武川神代

廿三

○は火事不能人の枝うあ焼くあり「焼ふりりされも橋さうぬうちま考  
梅り番やあつ一書り焼見群 牧童











居けるに別荘の客あり一州府居るに白むくの修し一橋を入

一ける客の難あり一とより是を言似く八朝六一般小白むく  
を言る事あり一は花街大金あり

是等のともく武家の例ありとを  
八朝小白き夜夜を言一とる尚考

○本八町坊三丁目辰紀作を文方あり  
材本あり世あり  
紀文あり之難号千山云  
靈巖寺境

○本八町坊三丁目辰紀作を文方あり  
材本あり世あり  
此友人元禄中橋小大分限あり

人の子あり花街難劇遠ひ行くの場を言一巨万の家を費

一ける事他人の知る所あり一とる費せし

○江戸真砂六十帖  
元禄中の  
小敷人坊よりえらるる喰町小住より今と

橋本町一引移るに流り  
○玄家某活より小武に某意思あり

信田小右衛門小山判官を殺し一とる流と云はる某意思橋

社小小山判官に靈祠あり又某意の故下海井小平に及後枝若按

ち及後及境の事あり小山判官の橋あり一ける中敷あり元禄

の頃まであり一とる崩きて今ありなり作りと云く

○元禄中の豪家非田住り今町小住せし  
尾実彦は常一の事あり

唐仏の釈尊の立像を得て身持弘福寺に寄付し  
奉るに元禄

初阿りえ下谷若菜玉院へ安座し  
尾実彦の墓に若菜玉院小住

被支婦の像もありと云  
○元禄中江戸各法寺に切あり

○元禄六年温法形のは戸繪馬小住二丁目三丁目の方志に寺所

の地地有修る町方志に寺所あり  
寺所あり

橋の矢の直流の南あり一とる橋の障あり  
寺所の天あり元禄

乃橋の吉祥も橋とあり今分の島橋と云はる橋あり  
寺所の地あり











寶永三年丙戌

正月二日備前柳井藩主輔率

名希綱号管海林小吉而  
鏡河柳田夏子并兼也

○正月十日和子刻和州須田町より和子一ヶ筋遠見附土手町

在和州町より本町石町通り小橋町河津町大門町より長谷川町和

泉町安海町辺新大坂町新材本町迄より和子一ヶ筋遠見附土手町

及別館より○正月十八日圓向院由和子一ヶ筋遠見附土手町

せし紫五十年忌吊法事あり○二月廿日夜亥刻和州須田町より

和子一ヶ筋遠見附土手町二町餘焼亡とす

○二月十日和子刻和州須田町より和子一ヶ筋遠見附土手町

之田氏必恭光号を和子一ヶ筋遠見附土手町  
兼以拜世 此の和子一ヶ筋遠見附土手町

命のそとを  
りふりぬり

○二月十七日備前栗山藩主率

名徳 林源助  
和子一ヶ筋遠見附土手町

○六月元字令吹替あり足守宝字報り

○七月より根岸権現社商船の和子一ヶ筋遠見附土手町

り和子一ヶ筋遠見附土手町あり○七月廿二日大要救り和子一ヶ筋遠見附土手町

○八月將和松林懐法因田植の歌金五八幡宮へ掲る

○九月十五日亥下刻大地震○十一月九日医師頼生方菴率

名徳  
但珠

の父之三田  
長松と兼

○屋敷船百艘不極る

名徳同和子  
拾遺小り

○十一月十六日己刻和谷作町より和子一ヶ筋遠見附土手町

○同日廿日夜子刻和泉町焼亡り和子一ヶ筋遠見附土手町

町葺屋町より和子一ヶ筋遠見附土手町長谷川町より和子一ヶ筋遠見附土手町

五町計り焼亡

同日辛

丁亥

正月和子一ヶ筋遠見附土手町再建あり和子一ヶ筋遠見附土手町



施放の事あり ○正月十日申刻漢田新同心町よりお火事所一の  
橋舟才てあより申の川業平天祥の社を元小橋ふより宮子別所

○二月晦日佃人攫奉生角率 甲七才 号室晋吾  
二本校上行古小津津

○三月八日大火あり 申正保福小記り 其抄不  
未詳 ○保城朝熊山山虚あさみか子こ  
さう

流井圓向院を寢惚 ○五月廿二日東叡山勸學院より翁僧於寂

○七月二日下谷雲集編者所持増善法中寂 其儀の目い田系より  
甲及流宮受不名者一人

○八月朔日小石川を雲又橋辺よりお火帳に又町を二午町程焼た

○九月は日熊谷安左衛門率 儀事本法古小墓あり碑のた小実相主いお月八生夜  
の園をてくひんを ちくとも浮世のやの里もか  
思うへらりれ

○九月廿七日儒所松浦交羽率 六十才公黙然松友上而  
日暮至南宮系小墓

○十月十二日佃人攫部嵐雲率 五十才大約正常檢者小墓存を釋世の句  
一葉發咄ひくをちる風のと

○十一月十六日連舟原里村恩陸率 六十九才

○徳國銀れ古幣止あり

○十一月廿日より富士山の根より頂をりは焼了天晴く雲蓋地震

夥しく雲蓋白灰降りて雪の如く地を埋む為南嶺よりおびり

あり白晝晴夜のよく小流は燈挑灯をとりを廿二日強ふま

廿二日おより天晴を敵日を洋く法人安堵を又廿六日廿六日

再び天曇り砂降り雲声の如き雲死地震あり是より雲灰降

廿八日本常の如く世時お味く山を宝永山といひ世人は以て噴噴

を喜み いふ拍煙袋小又えたり世昔富士山焼る例の延暦十九年三月廿二日より  
四月十八日と今年のおく焼貞親元年五月十歳白煙ると云く

○十一月廿八日法人を寢惚空率 三田小山  
大業七の率

宝永又年 戊子 正月廿

正月元日大お ○宝永正月廿二日武蔵相模三河をく砂降



○二月地上小白色を以て  
○三月秋元彦は岩田彦助といふ  
武員入る那場なむら兼井の田蹟久く處を久んを欲き  
之標を重傳小輝を建る○四月朔日兼人山田宗編率八十五才  
在が額ち地中長竜ち不華に子  
二月山田久作宗屋生初極率字俊と云

○五月十又疎よりて通用始る  
○六月郷人芳賀一晶率一才小室示  
考不室永通室妻の輪ふ那久世月と  
あり怪一寸二分重一女文字小田宗彦の  
巨ち採集所の  
門人植門と云く  
○深川の河川世子地産正元金鋼社の地産を六部を造る

是今年より始て江戸と新小安すす南品川品川と  
寺宝永七年 巳谷恭字也正徳二辰 粟野モカシと云す正徳四年 深川靈巖と  
八月享保二 同新永代と享保五子 〇冬より麻疹流行  
七月享保二

○十月廿二日算沙の作園の助孝和率号自中園流祖  
○後志之郡神幸地佛觀世喜宮帳并此法編ち事華

○十一月十五日深川八幡宮を造營遷宮  
○十二月三日將野隨川宗彦  
率正十七才 ○十二月廿二日後夜十代藤重率八十三才

○十二月谷中威敷と今のの隣ある宮今乃店宮小尚齒合あり  
此時後夜幸店百廿七才あり上府あり椅子小よる妙なる派の

傳二人は家衣俗人すあうえん素袂袴すあうえんと云す  
席の着の古実あると幸店幸店長生玉渡河之天正十年壬午小けるは信の比のさ  
の勤切あり仕を掃く後後報く唐土小いのり天竺阿蒙陀を給る殿の法衣を分る  
九十九方の財取廻一室永八年事率 同小云幸店老人の取小人八十才米のちり  
と云く子孫をり事上方八十才と云く八十の人と書て米ありといり

宝永六年 己丑  
正月十又錢通用止  
○去年十月廿二日の後為降く以正月十一日  
夜小くく為降る柳葉 ○二月流疫河運上御免

○二月二日より七月二日まで深川八幡宮宮帳



○六月家字銀通用をいさめる

○七月より九月まで日向院より洛東浄光院迄不動尊家帳

○九月多賀朝湖序の巻のりより後英一様と号し

○十二月廿二日能人小澤得入奉

○後辺事店対話記成

宝永七年庚寅 八月閏

二月上野清の移居社康車約形を移す

○二月二ツ宝銀法改

○湯の川は守宗刻開山本食米等上人あり

○其回向院より移す

○三月十九日南田川本母を移す

○二月より五月まで

○二月より五月まで

○二月より五月まで

○二月より五月まで

○二月より五月まで

○七月十一日

○七月より八月まで

○九月廿一日

○十月十日

○十一月

○十二月

○正月



大火あり一由あるせり○十一月青山梅窓院の齋齋を焼尽  
とせし時住持法蓮社末巻鏡的上人の妻小松女房の家畜  
ありて佛果を得て一依て一面の鏡を携へ来り別く鏡を  
加へて鏡を携へて六解脫を以ての因縁ともあるべしと云うと  
して爰覺て後例不一面の鏡あり上人等其の品ひをわすしこの  
鏡不加之を鑄改しむるなり

○十二月十九日末少別作田小柳町つき真田お山中を去り  
お火水為風烈し一々半町石町八丁塔靈巖海多むぬる長干  
五町幅二尺町より七八町小ぬる翌日辰別結了

○年中七面板七面大明神（菊とつる女は西き前余の娘  
夏の若ありておある所とす）

此年間記事

宝永中靈愛ふと門て南形原の月小をくる像の岡麿全江戸  
金地院境内に移す

○宝永中痘病を平り一以約込の百痘表たりすの妻若菜の痘を  
帳り約込宮主の市小賣りる求物り一りの痘病の患をのりて  
とりの後宮主よりの方おとるなり此時代近辺の童子を以て  
病けりとし○塵塚小藩摩芋の本日本小の宝永元申年  
あり藩忍より後後り末長藩をくむる種くるけなり享保  
廿年乙卯小石川書屋に在り裁く色えふ小のり弘まるる一記り  
考をわくせり ○鼻紙袋この世より始る

○宝永中お若小治世お実蔭公宮主市下向の所宮主を

お若小月と花と小知り人小貝を道主の雲のけり



○寛永九年板遠<sup>さかちとちとち</sup>近<sup>ちか</sup>座<sup>ざ</sup>常<sup>じょう</sup>の江戸島小<sup>こ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>玉<sup>たま</sup>揚<sup>あげ</sup>合<sup>あ</sup>の西<sup>にし</sup>より  
有<sup>あ</sup>棉<sup>わた</sup>の糸<sup>いと</sup>の南<sup>みなみ</sup>側<sup>がわ</sup>の江戸島小<sup>こ</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>玉<sup>たま</sup>揚<sup>あげ</sup>合<sup>あ</sup>の西<sup>にし</sup>より  
軒<sup>のき</sup>を並<sup>なら</sup>べし 飛<sup>と</sup>戸<sup>と</sup>時<sup>とき</sup>候<sup>こう</sup>天<sup>てん</sup>満<sup>まん</sup>文<sup>ぶん</sup>より東<sup>あづま</sup>の方<sup>かた</sup>小<sup>こ</sup>門<sup>かど</sup>あり

文江年表卷之三 畢



